

国際シンポジウム・記念講演 「世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために」 報告

伊坂青司（人文学研究所所長）

「世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために」というテーマを設定し、2005年11月11日・12日の両日、横浜キャンパス・セレストホールにおいて国際シンポジウム・記念講演を開催した。神奈川大学外国語学部設立40周年、および国際文化交流学科新設を記念する事業の一環として、外国語学部と人文学研究所を主催団体とし、人文学会の協賛を得て行われた。

報告にあたって、まず開催趣旨とプログラムの一覧を示しておきたい。

神奈川大学外国語学部設立40周年・国際文化交流学科新設記念
国際シンポジウム・記念講演
「世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために」

主催：神奈川大学外国語学部
神奈川大学人文学研究所
協賛：神奈川大学人文学会

【開催趣旨】

世界のグローバリゼーションが進行するなかで、諸民族固有の多様な文化が均質化されつつあります。そのような時代趨勢のなかで、風土と歴史に培われた伝統的な民族文化の固有性を見直そうという気運も生じています。欧米の文化を受容して現代に至っている日本でもまた、伝統的な文化の固有性が失われたわけではなく、むしろグローバリゼーションの進行のなかでその価値を改めて見直すことが求められています。

日本近代化の拠点となった横浜では今日、多様な異文化の交錯する都市として、日本文化と異文化の交流しあう共生社会の構築が焦眉の課題となっています。このような横浜に位置する神奈川大学において、世界から見た日本文化の特質と世界に向けた日本文化発信の可能性について、東アジアおよび欧米における第一級の日本研究者の視点から縦横に論じていただきます。積極的にご参加下さい。（入場無料、使用言語：日本語）

【プログラム】

第一部 国際シンポジウム

日 時：2005年11月11日（金）午前10時30分～午後5時30分
会 場：神奈川大学横浜キャンパス・16号館セレストホール

開会挨拶：神奈川大学外国語学部長 山口建治
総合司会：神奈川大学人文学研究所所長 伊坂青司

午前の部 報告（10時30分～12時）

メアリー・ナイトン（東京大学教養学部・比較文学比較文化助教授）

「戦後占領を脱する日本文学と文化——現在の観点からの読み直し」

午後の部 報告（1時～4時30分）

王勇（浙江工商大学・日本語言文化学院院長）

「坐る仏と立つ神——日本文化への視座」

シュテフィ・リヒター（ライプツィヒ大学東アジア研究所長・日本学科主任教授）

「『実体』としての日本か『クール』な日本か——グローバル化時代における日本研究のチャンスとリスク」

シンポジウム全体討論（4時30分～5時30分）

コメンテーター：鈴木彰（神奈川大学外国語学部助教授）

第二部 記念講演

日時：2005年11月12日（土）午前10時30分～午後5時

会場：神奈川大学横浜キャンパス・16号館セレストホール

午前の部（10時30分～12時）

川田順造（神奈川大学大学院・歴史民俗資料学研究科教授）

「世界のなかの日本文化を考える——その方法をめぐって」

司会：伊坂青司（人文学研究所所長）

午後の部（1時～2時45分）

ドミトリ・ラゴージン（ロシア科学アカデミー社会科学研究所主任調査官）

「現代ロシアにおける日本文学」

コメンテーター：中本信幸（神奈川大学名誉教授）

山火正則学長挨拶

特別記念講演（3時～4時30分）

ドナルド・キーン（アメリカ・コロンビア大学名誉教授）

「日本の秘められた文学」

司会：水野晴光（人文学研究所「文化のかたち」研究会代表）

以上の開催趣旨とプログラムに従って行われた国際シンポジウムと記念講演の概要は、以下の通りである。

開会冒頭で山口建治外国語学部長は、今回の国際シンポジウムと記念講演が神奈川大学外国語学部設立40周年と国際文化交流学科新設を記念するものであり、とりわけ国際文化交流学科の新設が外国語学部の再出発となるであろう意義を強調した。

第一部として行われた「国際シンポジウム」の最初の報告は、メアリー・ナイトン女史による「戦後

占領を脱する日本文学と文化——現在の観点からの読み直し」であった。女史は、戦後日本の女流作家である倉橋由美子の作品『パルタイ』と『スミヤキストQの冒険』を採り上げ、1960年代の日本における「革命」精神に孕まれた複雑性を、それらの作品解釈によって浮き彫りにした。その解釈は、文学テキストのなかに止まるものではなくて、「革命」精神に見られる「有機的なもの」（「細胞」）という生命論的・生物学的概念を、現代建築運動の理論である「メタボリズム」（新陳代謝）と対比的に論じる、興味深い視点によって裏付けられたものであった。

午後の部では、王勇氏が「坐る仏と立つ神——日本文化への視座」と題して報告された。日本独特の茶室や日本庭園の枯山水、そして広隆寺の国宝「半伽思惟像」などを例にして、日本文化のなかにある「坐る」姿勢が西洋文化のなかにある「立つ」姿勢と対照的であることを指摘した。そしてこの東洋文化にも共通する「坐る」姿勢が、内面的な精神世界へと通じることの重要性を強調された。「坐る」文化が日本に限定されるものではなく、アジアの道のネットワークのなかで理解することができるという視点は、日本文化とアジアの文化交流にとって重要なものであると感じることができた。

続いて、シュテフィ・リヒター女史は「「実体」としての日本か「クール」な日本か——グローバル化時代における日本研究のチャンスとリスク」と題して報告された。近代社会のなかでは日本学や日本研究はナショナリズムの枠内にあったが、1970年代以降、「方法的ナショナリズム」を克服しようという試みが出てきていることが指摘された。文化のアイデンティティを不断に分節化することによって、「日本」もまた「世界から見た日本」「日本とドイツ」「東アジアにおける日本」といったフィギュレーションによって分節化されるべきことが提示された。日本研究のリスクを、むしろこれからの日本学にとってのチャンスとして積極的に捉えるという視点が印象深かった。

シンポジウムの全体討論は、コーディネーターの鈴木彰氏の司会によって進められ、鈴木氏から提題者への質問と提題者相互のディスカッションによって、基調講演の内容がより豊かで鮮明なものとなった。討論の多岐にわたる内容についてカバーすることはできないので、ポイントになる部分のみをピックアップするにとどめておきたい。

メアリー・ナイトン女史は、倉橋由美子の作品に象徴される1960年代の日本の文化状況が現代日本にもつながっている側面のあることを指摘された。倉橋の文学や60年代の日本の状況が、はたしてアメリカにおいて理解できるかどうかという点については、アメリカの60年代の状況とは必ずしも共通するものではないとされた。むしろ現代の日本の学生は、60年安保闘争の学生運動のように活動することはないが、別の方法で運動の生じる可能性は否定できないとされた。また60年代の建築運動としてのメタボリズムは、同じような規模ではないにしても、黒川紀章に見られるように現代日本にもつながっていることが指摘された。そして生物学的な概念であるメタボリズムが、現代の生物学における遺伝子の構造にも通じるという指摘は、興味深い問題につながるものと思われた。

王勇氏は日本の文化をアジアの文化交流史という文脈のなかで理解する視点から、シルクロードならぬブクロードについて解説された。日本から派遣された遣唐使は20年に1回と多くはないが、中国と日本の文化的共通性を感じさせるのは書籍の伝播によるという。正倉院に遺された書籍のように、日本人も中国人と同じ書籍を読んだゆえに、共通した精神風景が形成されてきたとされた。また、西洋と東洋を対比するステレオ・タイプの議論に対しては、「坐る」文化のように風土のなかで形成されてきた生活様式の共通性を指摘された。さらに西洋と東洋という対置ではナショナル・アイデンティティを脱構築するのではなくて再構築することにならないかという質問に対しては、アジアの文化のなかの多様性の側面を浮き彫りにするためにも、西洋と東洋との対比が有効であるとされた。

シュテフィ・リヒター女史は、文化的多様性という観点から、また異なったパースペクティブから、エリア・スタディーズを研究対象にする必要性を改めて強調した。また日本のポップカルチャーが外国

に与える影響力が一般には評価され、また漫画やアニメが研究対象として認められるようになってはきたが、それらがどうして日本だけではなく欧米やアジアに広がっているのかを理解するには、現代の生活様式や社会の機能のあり方を全体として見る事が重要であるとされた。さらには、ドイツにおいて日本学が置かれている状況のリスクを、むしろ日本学と中国学を東アジア学として統合するなど、国際的な連携による日本研究という方向性へのチャンスとして捉えることが改めて提示された。

*

二日目の第二部は、3名の先生方に記念講演をしていただいた。

午前の部では、川田順造氏に「世界のなかの日本文化を考えるーその方法をめぐって」と題して講演いただいた。グローバル化のなかで多文化の共生はどのようにして可能か、日本文化は世界のなかでどのような位置を占めるかという二つの問いに答えることを課題として、グローバル（地球規模）をユニバーサル（普遍的）と混同することなく、ローカル（地方的）な文化の価値に視点を置くことがまず提示された。幕末から明治期の日本文化がヨーロッパでどのように理解されていたのか、文化の遠近法という手法と図像を用いながら検証された。具体的な例として、日露戦争前後の時代にプッチーニのオペラ『マダム・バタフライ』に映し出された「日本」は、当時のヨーロッパと日本との特殊な関係のなかで作られたもので、けっして普遍的なものではないとされた。ヨーロッパの日本理解は固定的に捉えられるべきではなく、変動する歴史的条件のなかで変化するものであると同時に、日本人にとっての「世界」もまた歴史的状況によって異なるということが強調された。「日本」と「世界」との関わりが歴史的状況のなかで変化するという視点は、図像を資料にしながら具体的で説得的であり、講演の後の会場との質疑応答もまた活発に行われた。

午後の部では、当初記念講演を予定していたヴァチスラフ・V・イワーノフ氏（ロシア・世界文化研究所所長）の来日が困難になり、事前に送っていただいたロシア語原稿の日本語訳「ロシア学者から見た日本仏教」を会場で代読することとした。ロシア語からの翻訳と代読については、本学のロシア語担当で人文学研究所の常任委員でもある堤正典氏が担当した。

それに引き続いてドミトリ・ラゴージン氏に「現代ロシアにおける日本文学」と題して講演をしていただいた。これまでのロシアでは、日本研究者や翻訳者によって日本の古典文学と日本文学の紹介が行われ、世界文学の一部として広く認められるようになっている現状が報告された。特に90年代の改革の結果、「自由空間」となったロシア社会のなかで、読者の関心が現代日本文学にシフトし、いわゆる「村上春樹ブーム」が生じるなどの現象が生じているという。そのような現代文学への関心の高まりの背景に、「ハイテク」風景と神話的意識の結びつき、現代文明のなかの「怪しい」感覚、日常生活に満ちる神秘主義、自然への「親しい」態度などが指摘された。また近年のロシアにおける俳句コンクールや連歌のインターネット・サイトなども紹介され、ロシア社会における日本文学への関心の現状を知ることができた。

講演の後、コメンテーターの中本信幸氏からコメントがあり、それを踏まえて会場との質疑応答が活発にかわされた。

特別記念講演に先立って、山火正則学長から挨拶があった。神奈川大学のこれまでの歩みと全国の大学における神奈川大学の位置づけを概観しつつ、今回の国際シンポジウムが外国語学部設立40周年および国際文化交流学科新設を記念して行われることから、特に国際文化交流学科の担うべき課題と国際交流に果たすべき役割について述べられた。またシンポジウムの報告者、記念講演の講演者、とりわけ

特別記念講演を引き受けていただいたドナルド・キーン氏への謝辞が述べられた。

ドナルド・キーン氏の経歴と著作が司会の水野晴光氏によって紹介された後、氏は「日本の秘められた文学」と題して特別記念講演をされた。日本の日記文学をテーマにして、平安朝から現在に至る日記の伝統が、日本にしかない文学のジャンルとして性格づけられた。日記は平安朝の公家では、長男が誤りなく先例に従って行動するように書かれた〈公〉の日記であったが、同じ時代の女性は自分の悩みを日記の中で語り、この〈私〉の日記が文学として読まれるようになったという。また鎌倉時代から旅日記が多く書かれ、京都から鎌倉へ旅行する途中で見たものが日記に描写されたりしたが、徳川時代の旅日記の最高のものである芭蕉の紀行文には、過去の歌に詠まれた「歌枕」からインスピレーションを受けるといふ文学的な目的があったという。文学としての価値がないように見える日記でも、本人にとって大事であるだけでなく、時代の世相を伝えるものとして価値があるのであり、ごみと一緒に捨てられている日記は「秘められた文学」であるとされた。氏の講演と会場との質疑応答により、日本における日記文学の伝統と日記の持つ意味を改めて見直すきっかけになったと思われる。

＊

二日間に渡って行われた国際シンポジウム・記念講演の参加人数は、第一日目の国際シンポジウムが延べ約800名、第二日目の記念講演が延べ約350名で、二日間を通してみると延べ約1150名という盛況であった。また記念講演の後に開催されたレセプションには約60名の方々に参加していただき、盛況のうちに全日程を終えることができた。

私たちの企画に賛同して、アメリカ・ドイツ・ロシア・中国から遠路はるばる来日していただき、また国内からもお忙しいなか報告と討論、そして講演をしていただいた方々に、厚く御礼を申し上げたい。今回の国際シンポジウム・記念講演の成果については、2006年度に『人文学研究叢書23』として刊行を予定している。

また今回の企画は、神奈川大学学術交流事業予算によって実現した。学長を始めとする教学執行部、また学長室のご支援に御礼を申し上げたい。さらに、今回の企画を外国語学部設立40周年記念事業として位置づけていただいた山口建治外国語学部長、ならびに実際の運営に携わっていただいた実行委員のメンバー、人文学研究所の運営委員のメンバー、そして同研究所の事務の方々、アルバイトの学生諸君に感謝したい。